

迎合と抵抗の記憶

太宰治『惜別』と大東亜共栄圏

澤辺真人

はじめに

一九四一年、日本が米英に宣戦布告し、太平洋戦争が勃発すると、日本は大東亜共栄圏の建設に着手した。大東亜共栄圏建設の理念は、欧米植民地としてのアジア諸国を解放し、団結することにあった。しかしそれは大義名分に過ぎず、その実態は盟主日本による事実上の植民地支配に等しかった。翌一九四二年には大東亜建設審議会が設置され、さらに翌一九四三年一月五日には大東亜共栄圏諸国の首脳を招請した大東亜会議が開かれるなど、大東亜共栄圏の建設は矢継ぎ早に進んでいった。大東亜会議にて大東亜共同宣言が採択されると、内閣情報局と日本文学報国会を通して、その五大原則を文学作品化する企画が持ち上がった。その企画の中で生まれた唯一の小説が、太宰治の『惜別』（朝日新聞社 一九四五年九月）である。⁽¹⁾

日本文学報国会によって、小説、詩、短歌、俳句、劇文、漢詩漢文の各部会幹事会が各々ひらかれたが、特に小説部会は活発であった。「大東亜各国民に皇国の伝統と理想を宣布し共同宣言の大精神を滲透」させることを目指し、一月一〇日付発行『文学報国』で既に執筆候補者に久米正雄、火野葦平、菊池寛ほか諸氏が挙げられ、一月一五日、二四日、翌年一月三日と討議を重ねた。⁽²⁾そこに太宰治が名を連ねたのは、一月三日の協議会でのことであった。そこでは約五〇名の執筆希望者に対し小説の梗概並びに意図の提出を求め、同年末審査のうえで太宰を含む六名の作家が選ばれた。⁽³⁾正式に執筆依頼を承けた太宰は、小田嶽夫らの援助を受けつつ、また仙台での実地調査を経て、一九四四年末に『惜別』の稿を起こし、翌年二月に脱稿した。

以上の成立背景に明らかのように、『惜別』には太平洋戦争下における国策小説としての一面が色濃くある。そこに、「東

京八景」(『文学界』一九四一年一月)以来の太宰ファンを自称していた竹内好が嘔みついた。竹内は太宰の「戦争便乗の大勢に隻手よく反逆」する「芸術的抵抗の姿勢」に惹かれていたが、『惜別』を目にして「太宰治、汝もか、という気がして、私は一氣に太宰がきらいになった」という⁽⁴⁾。これに端を発し、赤木孝之は『惜別』を時局への「便乗、⁽⁵⁾迎合」と捉え、藤井省三は『惜別』を「戦争協力文学」と断じている⁽⁶⁾。

また併せて、『惜別』に描かれる「周さん」なる人物と、そのモデルとなった中国の文豪魯迅の相違点も、批判の槍玉に挙げられる。竹内は、特に日本留学時に「魯迅の受けた屈辱への共感が薄い」と指摘している⁽⁷⁾。この指摘に埋没する形で、先回国策小説としての一面はいわば前提となり充分に論じられず、いたきらいがある。総じて、魯迅研究の権威による酷評は当時から現代に至るまで根強く、その意味で『惜別』の評価は低迷の一途を辿っているといえるだろう。

先行研究における『惜別』批判の主な論拠は二点、一つは国策小説であること、いま一つは「周さん」と魯迅との相違である。しかし、後述するように、前者は戦時下の太宰文学に散見する抵抗の姿勢を、後者は同時期に太宰が古典やフォークロアのパロディ作品を多く執筆していたことを、それぞれ放棄している。それにもかかわらず、『惜別』が竹内諸論に規定された文脈のみに拠って論じられるようになって久しい。そこで本稿では、戦時下における太宰の姿勢と作風から『惜別』の国策小

説としての一面を問い直し、そこに眠る戦時下の記憶を喚起したい。

一 戦時下の太宰文学 ― 迎合と抵抗 ―

戦後、「十五年間」(『文化展望』一九四六年四月)にて「昭和十七年、昭和十八年、昭和十九年、昭和二十年、いやもう私たちにとつては、ひどい時代であつた」と回想されたように、戦火は無論のこと、紙そのものの不足、言論統制下という状況、様々な事情が重なり、多くの作家が筆を折った戦時下における太宰の仕事ぶりには舌を巻く。太宰は古典やフォークロアの優れたパロディ作品を多く世に送り出し続け、その名を高からしめた。単に著作数という意味でも群を抜くが、神谷忠孝は戦時下の文学の価値について次のように述べ、太宰の功績を称えている。

戦時下の文学を考えるときの一視点ということについて私見を述べれば、文学的抵抗のかたちとして、筆を折る場合は除外すると、素材の中にいかにさりげなく抵抗の姿勢をこめたかということによって作品の価値が問われていいと思う。発禁すれすれのところで、読解力のある人なら了解するようなレトリックをいかに駆使するかはその作者の力量がうかがえるのである⁽⁸⁾。

戦後に、戦時下の自身を「情報局の注意人物」と自虐的に振り返ったように、太宰は度々作品の一部ないし全文を削除されていた。⁽⁹⁾ 一方で、内閣情報局の目をくぐり抜けた太宰の抵抗の証も多く残っており、神谷ほか多くの研究者がそれを指摘している。その最たる例としては、やはり『お伽草紙』（筑摩書房 一九四五年一〇月）が挙げられよう。

『お伽草紙』は一九四四年六月に脱稿され、「まえがき」と「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」の四編からなる。作家である語り手は、「カチカチ山」までを書いて、「舌切雀」冒頭で次のように語りはじめ。

私はこの「お伽草紙」といふ本を、日本の国難打開のために敢闘してゐる人々の寸暇に於ける慰労のささやかな玩具として恰好のものたらしむべく、このごろ常に微熱を発してゐる不完全のからだながら、命ぜられては奉公の用事に出勤したり、また自分の家の罹災の後始末やら何やらしながら、とにかく、そのひまに少しづつ書きすすめて来たのである。

「日本の国難打破のために」といえば、一見敬虔な日本国民的姿勢を示しているようではある。「不完全からだ」でありながらも、お国のためと身を粉にして尽くす精神は、まさしく国家総動員体制下における戦意昂揚の美談といえよう。しかし

続けて語り手は、「カチカチ山」と「舌切雀」との間に「桃太郎」を書く予定があつたこと、そしてあえて「桃太郎」を書かなかつたことを告白する。

しかし、私は、カチカチ山の次に、いよいよこの、「私の桃太郎」に取りかからうとして、突然、ひどく物憂い気持ちに襲はれたのである。（中略）いやしくも桃太郎は、日本一といふ旗を持つてゐる男である。日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者が、そんな日本一の快男子を描写できる筈が無い。私は桃太郎のあの「日本一」の旗を思ひ浮べるに及んで、潔く「私の桃太郎物語」の計画を放棄したのである。

その言い訳がましい語り隠れて、日本の旗を背負った桃太郎の姿を書きたくないという意志がうかがえる。戦時下において「桃太郎」が戦意昂揚に用いられていたこと、そしてそれを『お伽草紙』から「除外」⁽¹¹⁾ したことの軍国批判性については、高田千波が整理している。桃太郎に日本軍の影を、鬼に所謂鬼畜米英の影を見たとき、桃太郎が鬼を討つ物語を書きたくないという語り手に、断じて日本軍に加担しないという抵抗の姿勢を読み取ることが容易であろう。その文脈に即せば、先の語りにも、寧ろ不自然なまでに遜った恭しい語りによって浮き彫りにされるように、「不完全のからだ」の国民に「奉公の用事」を

強い、罹災者を救わない国家に対する、語り手の非難の意がみえてくる。その意味で、先の敬虔な姿勢は同時代言説のカリキチュアであった。

しかし、この方法が両義性を孕む危険な綱渡りであったことは否めない。字面をさらえば、「日本の国難打開のために敢闘してゐる人々」のための物語は、やはり戦争協力文学と見做されうるものであった。

他にも、例えば「十二月八日」(「婦人公論」一九四二年二月)に次のような一節がある。

本当に、此の親しい美しい日本の土を、けだものみたい
に無神経なアメリカの兵隊どもが、のそのそ歩き廻るな
ど、考へただけでも、たまらない。此の神聖な土を、一歩
でも踏んだら、お前たちの足が腐るでせう。お前たちには、
その資格が無いのです。日本の綺麗な兵隊さん、どうか、
彼等を滅つちやくちやに、やつつけて下さい。(中略)か
ういふ世に生れて、よかつた、と思ふ。ああ、誰かと、う
んと戦争の話をした。やりましたわね、いよいよはじま
つたのねえ、なんて。

「十二月八日」は、「日本のまぶしい家庭の主婦」の綴つた日記という体裁を採っている。「どうも極端すぎる」「愛国心」を
持った「主人」も含めて、開戦直後の戦争言説のカリキチュア

ではあるものの、字面を追えばやはり開戦の昂揚が描かれた戦争協力文学と見做されうるだろう。⁽¹²⁾

また、同時期に書かれた『右大臣実朝』(錦城出版 一九四三年九月)についても、武田泰淳は「かにを食べるところなんて滑稽感を出しているが、あのなかに太宰の複雑な反抗心があるもっている」として、それを「抵抗しているという証拠はないわけけれども読む人が読めばわかる」方法というが、一方で鳥居邦朗は、「アカルサハ、ホロビノ姿デアラウカ」の一節について「やはり客観的には滅亡の美学として、体制側からは歓迎されるものとなる」と、その拭えない戦争協力文学としての一面を指摘している。⁽¹⁴⁾ 泰淳も「あの当時実朝を書くということは安全なのですね、日本の伝統を研究するのだということ」と前置きしているように、当時「実朝を書くということ」自体が、日本賛美の姿勢として時局への迎合と見做されたこととは否めない。

戦時下において、太宰は時局に迎合した日本讚美に乗じて、あるいは過度な愛国精神を描くこと自体に、アイロニーを忍ばせていた。古典やフォークロア、そしてその題材自体の持つ日本賛美による迎合の姿勢は、その隠れ蓑として重宝された。そして現代もなお戦時下の太宰文学は、戦争協力文学か「読む人が読めばわかる」「文学的抵抗」かの間で解釈が割れている。しかし、その両義性は、戦時下における太宰の創作方法の一つとして相対化され、捉え直されるべきであろう。

二 『惜別』執筆背景

戦時下における太宰の方法をおさえたところで、本章より『惜別』に目を向けていこう。太宰の『惜別』執筆の影には、些入り組んだ背景がある。先行研究では、国策小説を書くことと魯迅を素材にした小説を書くこと、これらに対する太宰のモチベーションが混同されがちである。

まず、『惜別』前後」（『文芸日本』一九五九年六月九月）及び「大東亜共同宣言と二つの作品——『女の一生』と『惜別』——」（『文学』一九六一年八月）で本格的に『惜別』に取り組んだ尾崎秀樹は、同文学作品化企画において「太宰治の名前が、最初の場合には見当たらず、十九年一月の記事にはじめて登場すること」に留意している。¹⁵ 本稿冒頭で示したように、「最初」は執筆候補者のリストを、「十九年一月の記事」は執筆希望者のリストを、それぞれ指している。後者から太宰の名が見られるのは、すなわち太宰が国策小説を書くことを自ら希望したということか。

一九四四年一月三〇日山下良三宛書簡、これは今日確認できる限り最古の『惜別』執筆についての太宰自身の言であるが、そこに次のようにある。

新年早々、文学報国会から大東亜五大宣言の小説化といふ難事業を言ひつけられ、これもお国のためと思ひ、他の

仕事をあとまはしにして、いささか心胆をくだいてみます。

「難事業を言ひつけられ」云々とみえ、国策小説執筆の主体性を疑うこともできるが、一方で、国策小説執筆を自ら希望したことに対する負い目とその秘匿と捉えることもできる。

また、『惜別』「あとがき」に次のようにある。

この『惜別』は、内閣情報局と文学報国会との依頼で書きすめられた小説には違ひないけれども、しかし、両者からの話が無くても、私は、いつかは書いてみたいと思つて、その材料を集め、その構想を久しく案じてゐた小説である。

太宰は『惜別』を「書いてみたいと思つて」「その構想を久しく案じてゐた」という。これを鵜呑みにはできないが、事実太宰の魯迅への関心が深かったことについては、尾崎が次のように整理している。

太宰が魯迅を読んだのは、岩波文庫の『魯迅選集』くらいからだつたと思われる。（中略）小田嶽夫の『魯迅伝』が出たとき早速読んだことは前に書いた。小田とつきあうようになってからは、かなり魯迅について教えられるところがあつたらしく、内閣情報局と文学報国会に依頼されたときは、魯迅を対象に扱んだことからして、太宰の傾倒の

程が伺われる。⁽¹⁶⁾

『魯迅選集』が岩波書店から刊行されたのは一九三五年、小田の『魯迅伝』が筑摩書房から刊行されたのは一九四一年である。国策小説企画の持ち上がる以前から太宰は魯迅に関心を抱いていたようである。なお、魯迅逝去が一九三六年一〇月で、例えば貴司山治創刊「文学案内」では、一九三六年一月号で特集が生まれ、翌三七年三月号で藤野巖九郎寄稿「謹んで周樹人様を憶ふ」が掲載されるなど、魯迅に関する同時代言説に触れる機会にも事欠かなかったであろう。

また、太宰は一九四〇年頃から「清貧譚」（「新潮」一九四一年一月）、「帰去来」（「八雲」一九四三年六月）、「竹青」（「文芸」一九四五年四月）といった中国文学にモチーフを得た作品を断続的に執筆していた。一九四四年八月二九日弟子堤重久宛書簡に「そろそろ魯迅に取りかかる。いまは小手調べに支那の怪談「竹青」など試作してゐる」とみえ、着々とその土壌を耕していることがうかがえる。しかし、ここで考えなければならぬのは、尾崎は太宰が「依嘱されたときは、魯迅を対象に扱んだ」としているが、『惜別』「あとがき」に内閣情報局と文学報国会からの「話が無くても」「書いてみたいと思つて」いたとあるように、太宰にとって国策小説を書くことと『惜別』を書くこととはそもそも全くの別問題ではなかったかという点である。『惜別』に関わる太宰の言としては、先に挙げた一九四四年

一月三〇日山下良三宛書簡、八月二九日堤重久宛書簡に加え、一〇月一三日小山清宛書簡にも「私は西鶴の仕事も一段落で、そろそろ魯迅に取りかかるか、それとも短編集でも一つ編まうかと思案中」とみえる。年始、「難事業を言ひつけられ」と山下に愚痴を零してから半年を優に過ぎ、ようやく「そろそろ魯迅に取りかかる」と堤に宣言したかと思えば、その一月後には「短編集でも一つ編まうか」と小山に漏らし、なかなか腰が入らない。内閣情報局と文学報国会から正式に国策小説を依嘱されたのは一二月に入ってからのことではあるが、先に述べた魯迅に対する関心とは裏腹に、執筆は遅々として進んでいなかった。

依嘱を承け、太宰はようやく仙台での実地調査に向かった。仙台での收穫としては、二〇〇字詰め原稿用紙一五枚程の所謂『惜別』ノート⁽¹⁷⁾が残されている。当時の仙台の世相や風俗、仙台医専の行事、新聞の広告や報道記事が見える。当時の魯迅その人を知る資料は得難く、そういった意味では、『惜別』の素材は得られたが、「周さん」の素材はさして得られなかったようである。帰京した太宰は、魯迅研究の権威から僥倖を授かる。後述する竹内好の『魯迅』（日本評論社 一九四四年二月）である。先述したように太宰の「芸術的抵抗の姿勢」に惹かれていた竹内は、「武田泰淳から、太宰治が私「竹内好」のことをほめていたという話」を聞き、嬉々として自著『魯迅』を謹呈した⁽¹⁸⁾。それが一九四五年二月初めのことで、それを機に

太宰は、『惜別』「あとがき」曰く「少年の如く大いに勢いづいてこの仕事をはじめ」、同月二〇日に脱稿した。

先述したように、太宰は「日本の国難打破のために」と銘打った『お伽草紙』で、日本の旗を背負う桃太郎を描くことを拒否した。『惜別』が国策小説企画として刊行されたことは紛うことないが、それと太宰の執筆意図が重なるとは限らない。太宰の魯迅への関心、そして国策小説という体裁のみから竹内らが早々に捺した戦争協力文学の烙印、これらが負の方向にシナジーを生んで今日の『惜別』評の一角を形成している。しかし、その前提となる後者の戦争協力文学を積極的に書いたという解釈は、戦時下における太宰の迎合と抵抗の両義性を有した方法を踏まえても、問い直される必要がある。

三 「老医師」の語り — その批評性 —

『惜別』は所謂入れ子構造を採っている。一九四四年頃、「老医師」が四〇年前の学友「周さん」との親交を綴った手記を、「自分（太宰）」が「これは……一老医師の手記である」と紹介するものである。先行研究では、竹内諸論に引かれる形で「周さん」と魯迅の相違に目がいきがちで、作中で「周さん」の物語が如何にして語られたか、という問題は等閑視されてきたきらいがある。しかし、語りの持つ批評性、これを読むことが、戦時下の太宰文学の方法を知る鍵となる可能性を『お伽草紙』ら

が示していた。そこで、「周さん」その人ではなく、彼を語る（綴る）「老医師」と、語られる（綴られる）「周さん」という視点から、『惜別』を捉え直してみたい。

「老医師」が「周さん」との親交を語り始めたその発端は、「記者」の捏ちあげた記事であった。「記者」は「日支親善の美談」を書くために、「魯迅」の嘗ての学友である「老医師」を取材に訪れた。できあがった記事を目にした「老医師」は、自身の「胸底の画像」との相違に苦痛を感じ、正しく書き残すこととしたという。⁽¹⁹⁾

ここに太宰が戦時下のジャーナリズムに辟易していたことが反映されていることはいままでもないが、「老医師」の語りに着目すれば、『惜別』では物語を生成すること自体への問題が提起されているようである。すなわち、典拠とそのパロディ作品間の抱える問題であり、ひいては物語内容を語り手が物語言語へと再構築する際の語りの問題である。⁽²⁰⁾「記者」が「老医師」の過去を記事へと再構築すること、或は「老医師」が自らの「胸底の画像」を手記へと再構築すること、その過程に、語り手たる「記者」「老医師」の如何なる恣意がはたらき、その物語行為そのものを如何に読むことができるか。「老医師」の物語行為についての問題意識は顕著で、「周さん」が後に「魯迅」として書いた作品について次のように述べる。

ひとの話に依れば後年、魯迅自身も仙台時代の追憶を書

き、それにもやはり、その所謂「幻燈事件」に依つて医学から文芸に転身するやうになつたと確言してあるさうであるが、それはあの人が、何かの都合で、自分の過去を四捨五入し簡明に整理しようとして書いたのではなからうか。人間の歴史といふものは、たびたびそのやうに要領よく編み直されて伝へられなければならぬ場合があるらしい。どんな理由で、魯迅が自分の過去をそんな工合に謂はば「劇的」に仕組まなければならなかつたか、それは私にもわからない。

「周さん」は後に「魯迅」を名乗り、自身の「仙台時代」をモチーフとする小説を書いたようである。現実の魯迅に即するならば、『呐喊』『自序』（一九二三年一月著）と「藤野先生」（一九二六年一月著）に、留学時代に経験したという「幻燈事件」と文芸への転身が描かれている。しかし、「老医師」にいわせると、それはもはや「劇的」に再構築された創作であり、そのモチーフとなつた「仙台時代」とは当然乖離しており、そののみを妄信することに警鐘を鳴らしている。そしてわざわざそれを行つた「魯迅」の意図は解さないという。

一方の「記者」は、「社会的な、また政治的な意図をもつた読物」を書くために、「老医師」の「胸底の画像」すなわち情報元を歪曲させた。語る側から提示されたその論理に、「老医師」は語られる側から苦言を呈した。

作者太宰は、無論作中の「自分（太宰）」を含めて如何なる語り手とも区別されるが、ストーリーテラーという意味では、語る側の「記者」の立場に近い。しかし、『惜別』で太宰はまず、語られる側による語る側への苦痛を描出している。古典やフォークロアを優れたパロディ作品に再構築してみせた太宰が、また『惜別』で典拠との相違を痛罵されることとなる太宰が、である。典拠とそのパロディ作品の距離について、すなわち近すぎては模倣とされ、遠すぎれば歪曲とされる、パロディの手法自体の抱えるパラドックスに、太宰は既に防波堤を築いていた。典拠とそのパロディ作品の相違について、すなわち竹内らの批判的である魯迅と『惜別』における「周さん」との相違について、少なくとも太宰が無心に典拠を陵辱していたわけではないと考えてよいだろう。竹内諸論のような批判が想定内のものであつたことは、「老医師」の語りに明らかである。

また、記事において「老医師」は「記者」に語られる者であつたが、手記においては語る者となる。「老医師」は自らの「胸底の画像」を頼りに手記を書き出したものの、「どこかに非常な見落しがあるかも知れず」、「どうせ、私には名文も美文も書けやしない」と、甚だ自信なさげであつた。しかし、語り手自らを貶め、弱者の側から穿つ批評の方法は太宰の十八番ではなかつたか。²⁾

といつても私は、何もあの新聞に連載された「親和の

先駆」といふ読物に、ケチを附けるつもりは無いのである。あのやうな社会的な、また政治的な意図をもった読物は、あのやうな書き方をせざるを得ないのであらう。私の胸底の画像と違ふのも仕方無いことで、私のは謂はばまあ、田舎の耄碌医者が昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけで書くのだから、社会的政治的の意図よりは、あの人たちの面影をただでいねいに書きとめて置かうといふ祈念のほうが強いのは致し方の無い事だらう。(中略)私の仕事も、敵の空襲に妨げられ萎縮するなどの事なく順調に進んで行きさうな、楽しい予感もする。

ここで「老医師」は、「ケチを附けるつもりは無い」「仕方の無いこと」とはいいつつも、「社会的な、また政治的な意図をもった読物」すなわち国策のプロパガンダを「あのやうな」と相對視している。そして「田舎の耄碌医者」を自称し、「昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけで書く」とそれに反発する。「日本一はおろか日本二も三も経験せぬ作者」が桃太郎を書くことを拒否した『お伽草紙』の方法を想起させよう。そして「社会的政治的の意図」を持った読物の取材に「しどろもどろ」になった「老医師」であったが、それを排して「昔の恩師と旧友を慕ふ気持だけ」で手記に臨むとき、「順調に進んで行きさうな、楽しい予感」を抱く。「老医師」にとつては、日本の「社会的政治的の意図」もまた、「仕事」の妨げになるという意味では「敵」

に等しかったのである。

このような「老医師」の時局に対する抵抗の姿勢は、若き日の「津田憲治」との交流においても、対比的に浮かび上がっている。東北の田舎出身であることに劣等感を禁じえない「老医師」に、東京人たる「津田」はいわば「国家の方針」の代弁者とみえ、手記には彼から受けた「第三国人」との交流についての指摘が綴られている。次に三点挙げる。

いけない。君は、それだからいけない。(中略)何せ、いま戦争中なのだからね。中立諸国の者たちには、実に複雑微妙な外交的術策を用いなければいけない。

これは国際問題だ、と彼はれいの如く大袈裟な事を言うのである。(中略)すなはち、周さんの背後には、一万名の清国留学生が控へてゐる。周さんひとたび怒らば、この一万の留学生は必ず周さんを応援して立ち上る。しかる時には、仙台医専の不名誉は言ふもさらなり、わが文部省、外務省も、清国政府に対し陳謝しなければならなくなるやも計り難い。実に、日支親善外交に、一大汚跡を、踏み残す事になる。

あいつ(周さん)は清国政府から選ばれて、日本に派遣されて来た秀才だ。日本は、あいつに立派な学問を教へ

込んでやつて帰国させなければ、清国政府に対して面目が無い。僕たち友人の責任も、だから、重大なんだよ。

「津田」は、実に当時の日本人らしい、国家に従順で敬虔な日本人の典型として「老医師」に映っていたといつてよいだろう。「津田」は常に日の丸を背負い、国際社会の一員たる自負を行動の基盤に置いて「複雑微妙な外交的術策」を駆使し、それを同じ一日本国民として「老医師」にも強いる。日頃「日本の外交方針に添った努力」をしている「津田」は、不登校気味でクラスの和を乱す「老医師」を誇り、「君はクラスの注意人物なんだ」と告げる。

そもそも、「外交的術策」を重んじる「津田」とそれを「ばからしい」と考える「老医師」は相容れるはずもなかった。両者の関係は、さながら後の「人間失格」(「展望」一九四八年六月八月)における「大庭葉蔵」と「堀木」の関係を髣髴させる。「堀木」は「世間」を盾に取って「葉蔵」を誇るが、「葉蔵」はそれに「世間とは個人じゃないか」という思想めいたものを抱いて反発した。「世間」と「クラス」と、規模こそ違えど、また「人間失格」では「世間とは」ということに問題意識の矛先が向けられるが、多勢の論理で正義を翳して蹂躪してくる他者を弱者の視点から穿つ批評の方法について、『惜別』にも通じるものを見出せる。また、「津田」の「外交的術策」は、「周さん」に「過度の親切」「少し苦痛」と言われてしまうようなものであった。如何せん

そこには、日露戦時の、ひいては太平洋戦争時に連なる、日本の功利的な外交意識が露骨に現れている。「津田」のいうところの「中立諸国の者たち」は、日露戦時における中国を指しているようであるが、一九四四年頃という「老医師」の語る同時代的文脈を鑑みるに、大東亜共栄圏諸国の影も重なってみえる。「第三国人」のスパイたる可能性に怯え、「清国政府に対して面目が無い」などと他国の顔色を窺うような台詞に隠れてはいるが、「立派な学問を教へ込んでやつて帰国させ」という物言いは、日本による大東亜共栄圏諸国の事実上の植民地支配の文脈から捉えられるべきであろう。日本で学ばせ、それを自国で広めさせる、その発想は「周さん」をいわば占領の苗木とするものである。後に「周さん」の送別会で見せた涙が「老医師」の溜飲を下げはしたが、日露戦時における「津田」の言説を以て、太平洋戦時における「独立親和」の意味が問い直されている。

「劇的」か否かは兎も角、『惜別』における「周さん」も、四〇年の歳月を経て「老医師」の語りにも再構築された存在である。所詮、竹内の鲁迅像と比較すべき四〇年前の「周さん」に、竹内も我々も触れることはできない。問題の所在は、一九四四年に嘗ての学友を「周さん」として再構築する「老医師」の語りにある。

以上では、「老医師」の語りから、その人となりや批評の対象を探ってきた。それでは、「老医師」は如何なる意図を以て嘗ての「周さん」を再構築したか。

四 大東亜共栄圏からの解放

鲁迅と「周さん」の相違を逸早く指摘したのは竹内好であった。それが『惜別』評を築き、今日にまで及んでいる。しかし、明確なモデルや典拠のある作品にそういった批評が生じうることを太宰が無論想定していたことは明白であった。語られる側の、無心に陵辱されることへの苦痛を描いていることが、それを証明している。考えるべきは、鲁迅と「周さん」の相違の有無ではなく、その意図であろう。

まず、竹内の批評を整理し、鲁迅と「周さん」の相違を確認しておこう。

鲁迅が、仙台の医学校で、日露戦争の幻燈を見て志を文学に立てたという話は、あまねく人口に膾炙している。これは彼の伝記の伝説化された一例(小田嶽夫『鲁迅伝』)であつて、私はその真实性に疑を抱く。そんなものでは恐らくあるまいと思う。(中略)／説話の出所はやはり彼の文章である。一つは「呐喊」自序であり、一つは「朝花夕拾」に収められた「藤野先生」である。²²⁾

小田嶽夫の『鲁迅伝』がそうであるように、先行研究では鲁迅が文学へと転向した背景として、『呐喊』「自序」と「藤野先

生」に描かれる二つの事件が屢々引かれる。一つは、語り手「私」が嘗て「藤野巖九郎」にノートの添削を受けていたことが、一部の同級生に不正行為と邪推された事件(以下、竹内好『鲁迅』に依い「いやがらせ事件」とする)である。「私」のもとに「汝悔い改めよ」云々と綴られた手紙が届く。不正行為自体は事実無根であり、「私」の疑いはすぐに晴れるも、中国人は低能児であるため、疑われるのは仕方がないと考えるに至る。いま一つは、所謂「幻燈事件」と呼ばれる事件である。「幻燈事件」は、日露戦争の折、ロシア軍のスパイとして捕えられた中国人が銃殺され、それを見た中国人が歓声をあげるといふ場面を、幻燈で観たことを指す。以上二つの事件を経て、自国民に絶望した鲁迅は彼らを救済するために文学へ転向した、というのが一般的な鲁迅解釈であるらしい。

『呐喊』「自序」は鲁迅が小説を書くに至った経緯を記したものである。そこに「幻燈事件」はみえるが、「いやがらせ事件」はみられない。三年後の「藤野先生」で初めて「いやがらせ事件」と「幻燈事件」が並んで登場する。この点から竹内は、「いやがらせ事件」を鲁迅の「文学志望とは直接に関係しない」虚構である可能性を示し、あくまで「象徴的」なものであると解釈している。これは後の尾崎秀樹も同様であり、二つの事件のみから鲁迅を論じることの危うさを指摘している。竹内は、鲁迅が「藤野先生」に「いやがらせ事件」を「象徴的」なものとして書いたとして、次のように述べる。

幻燈事件は、その前のいやがらせ事件と関聯を持っており、その両方に共通したものが、この場合は問題なのである。彼は幻燈の画面に、同胞のみじめさを見ただけでなく、そのみじめさにおいて彼自身をも見たのである。それは、どういふことか。つまり彼は、同胞の精神的貧困を文学で救済するなどという景気のいい志望を抱いて仙台を去ったのではない。恐らく屈辱を噛むようにして彼は仙台を後にしたと私は思う。(中略) 幻燈事件が彼に与えたものは、いやがらせ事件と同じ性質の屈辱感であつたと思う。屈辱は、何よりも彼自身の屈辱であつた。同胞を憐むよりも、同胞を憐まねばならぬ彼自身を憐んだのである。

二つの事件は、魯迅の文学への転向の契機にはなりえても、理由にはなりえない。竹内は、二つの事件に象徴される「屈辱感」こそが彼の転向の軸となつていて、と解釈している。そして、いわば「劇的」に描かれた二つの事件によって、すなわち「説話の面白さによつて真実を枉げてはならぬ」という。本章冒頭の引用と併せて、竹内は「真実」すなわち魯迅その人を追究し、こと彼の文学への転向においてはその内奥の「屈辱感」にこそ契機があるとしている。

それでは、一方の「周さん」はどうか。太宰は『惜別』にて、確かに「いやがらせ事件」を描き、「周さん」の文学への転向

に「幻燈事件」は、少くともその総決算の口実の役目を勤めたという事は認めざるを得ない」とおさえてはいる。しかし、竹内のいう「屈辱感」を描ききつたとはいいがたい。まず、「いやがらせ事件」について、『惜別』では主犯「矢島」が深謝し「周さん」と和解することで事件が「四方八方まるく」収まつてしまつてゐる。それでは魯迅の「屈辱感」が薄まり、連なる「幻燈事件」での「屈辱感」も強調されえない。太宰は竹内の指摘する「いやがらせ事件」の「象徴的な意味」、すなわち、「屈辱感」そのものを描きえていないのである。また「幻燈事件」についても同様で、『惜別』では、「周さん」は幻燈を上映する教室から忍び出てしまつてゐる。「藤野先生」では、魯迅が幻燈に「同胞のみじめさを見ただけでなく、そのみじめさにおいて彼自身をも見た」場面であるはずが、「周さん」は自己と向き合うことを避けており、尾崎曰く「自己嫌悪という言葉が、底の浅いところで捉えられて」しまつてゐる。

もつとも、以上で整理してきた批判や相違は、先述したように竹内の魯迅像というフィルター越しに「周さん」及び『惜別』をみてのものである。それでは、「老医師」の語る「周さん」に目を向けよう。「周さん」が文学を志した理由について、「老医師」は「所謂『幻燈事件』に依つて、その疑問が、突然、周さんの胸中に湧き起つた」といふ説は、少し違つてゐるのではなからうかと私には思われる」として、自身の「周さん」像を次のように語る。

彼は、あの幻燈を見て、急に文芸に志したのでは決してなく、一言でいへば、彼は、文芸を前から好きだつたのである。(中略)そうして彼の、かねてからの文芸愛好の情に油をそそいで燃えあがらせた悪戯者として、あの一枚の幻燈の画片を云々するよりは、むしろ、日本の当時の青年たちの間に沸騰してゐた文芸熱を挙げたほうが、もつと近道なのではあるまいかとさへ私には思はれる。

「老医師」は、「周さん」が文学を志した理由を、「文芸を前から好きだつた」ためとし、幻燈ではなく「当時の青年たちの間に沸騰してゐた文芸熱」がそれに拍車を掛けたとしていゝ。これに竹内の重要視する魯迅の「屈辱感」は霧散してしまふ。浦田義和も「絶望からの新生」が浮かび上がってこないと指摘している。²³しかし、くだいようだが、寧ろみるべきは、「老医師」の捉えた、或は太宰による、「屈辱感」の抑えられた「周さん」像の意味である。

「いやがらせ事件」と「幻燈事件」はそれぞれ、日本の中国蔑視、中国支配の文脈から生まれたものといえる。竹内の指摘するよう、二つの事件に象徴される「屈辱感」を魯迅の文学転向の軸とするならば、魯迅の文学転向もその文脈の中で生まれたものとも捉えられる。それは後の文芸運動の原動力となるが、それすらも日本の中国支配の文脈で解釈可能なものではなかった

か。

一方の「周さん」について、『惜別』の意図に「魯迅の晩年の文学論には、作者は興味を持ってませんので、後年の魯迅の事には一さい触れず」とあるように、また「老医師」も「私は彼の後年の尅大な著作物に就いては、ほとんど知るところが無い。それゆゑ、所謂大魯迅の文芸の功績は、どんなものであつたか何も知らない。」として、ともにそれを避けている。しかし、「このごろ皆の言つてゐるやうに所謂『幻燈事件』に依つて」云々とあるように、「老医師」は「魯迅」の周辺についてある程度の情報を得ていたようである。また、作中には「文章の本質、とかいう題」で、次の文章が挙げられている。²⁴

文章の本質は、個人および邦国の存立とは係属するところなく、実利はあらず、究理また存せず。故にその効たるや、智を増すことは史乘に如かず、人を誠むるは格言に如かず、富を致すは工商に如かず、功名を得るは卒業の券に如かざるなり。ただ世に文章ありて人すなはち以て具足するに幾し。嚴冬永く留り、春氣至らず、軀殼生くるも精魂は死するが如きは、生くると雖も人の生くべき道は失はれたるなり。文章無用の用は其れ斯に在らん乎。

「老医師」はこれを『同胞の政治運動にお手伝いするため』の文芸』とは異なる「名文」として、また「奇妙な執着を感じ」、

反復愛誦していたという。「老医師」が「社会的な、また政治的な意図をもった読物」すなわち国のプロパガンダを避けていたことは先に述べた。文章に「個人および邦国の存立」「実利」を求めず、しかし「用」であり、かつ「用」でありながら「実際の政治運動の如く民衆に対して強力な指導性を持たず、徐々に人の心に浸潤し、之を充足せしむる用を為すものだ」という「文章の本質」に惹かれたことも頷けよう。そして、「周さん」が後に「魯迅」として書いた「尫大な著作物」やその「文芸の功績」に、「老医師」は「政治運動」の香りを感じてそれを避け、文学を政治や革命運動の道具に用いるために志したのではなく、純粹に「文芸を前から好きだった」一青年像を「周さん」にみていたかった、とするのは牽強附会の説であろうか。少なくとも、「文芸を前から好きだった」と解釈するにあたって、「老医師」が「周さん」の後の「政治運動」を知りながらそれをわざわざ排して「敢えて苦手の理窟を大骨折りで述べ」たことは、太宰が『お伽草紙』でみせた、書かなかったことを書くことによる抵抗の方法を想起させる。「老医師」によって「周さん」の文学転向の理由は一見チープなものに解釈されたが、一青年の内面から生じた衝動に端を発しているという意味では、政治性が「除外」され、日本の中国支配やそのプロパガンダの文脈から解き放たれる方向に向けられているといえる。

しかし、「老医師」が手記を綴る際のスタンスは、「昔の恩師と旧友を慕う気持だけで書く」というものであったはずが、「老

医師」は「周さん」の表象から政治性を「除外」することによって、すなわちそのような意図を含んだ時点で、彼の手記は彼の忌避する「社会的な、また政治的な意図をもった読物」となってしまうている。そのアンビバレンスな物語行為を生んだのは、「老医師」の愛であった。振り返ると、「老医師」には愛を以て物事を好意的に捉えようとする傾向があった。「津田」の「外交的術策」然り、「矢島」の「いやがらせ事件」もまた然りである。「津田」の植民政策的言説や「矢島」の中国蔑視の言説は、当初は当時の日本人のカリカチュアとして「老医師」に語られていたことは明白だが、それらは愛故のものとして解釈され、美談として正当化された。それは結果として、大東亜共栄圏の論理を補強しており、その意味では「老医師」の手記は寧ろプロパガンダとしての機能を有してさえている。

尤も、「老医師」の愛は「津田」と「矢島」の言説を正当化し、大東亜共栄圏の論理を補強してはいるものの、そもそも両者が大東亜共栄圏の論理を体現していたことは揺るがない。「老医師」の愛ある解釈の影響を受けたのは、やはり「周さん」の表象であろう。「老医師」は自己の解釈によって、「周さん」の文学転向から政治性を「除外」しようとした。その意図を込めることによって、結果として「老医師」の手記はプロパガンダ性を帯びることになるが、その毒を以て毒を制すような物語行為には、「周さん」とその文学、ひいては中国ほか諸国を大東亜共栄圏の論理から解放させようとする意志を見出せる。

おわりに

以上のように、本稿では、『惜別』がその成立背景こそ戦争協力文学そのものでありながら、「老医師」の語りには、文学をプロパガンダに用いること、或はそれを強いられることへの批判意識が少なからず表出していたことを明らかにしてきた。振り返ると、『お伽草紙』の語り手はプロパガンダとしての同時代の文脈を孕む「桃太郎」断筆を宣言し、「老医師」はプロパガンダに「ケチを附けるつもりは無い」としながらも「恩師と旧友を慕ふ気持だけで」手記を書くことを前置していた。

日本賛美の中に日本批判を潜ませた戦時下の太宰文学の方法は、予てから迎合か抵抗かで議論されてきた。しかし、本稿では、そうした二極論に終始するのではなく、その迎合と抵抗の両義性を孕んだ方法を太宰一流の技法として相対化し、捉え直そうと試みた。殊に『惜別』が、国策小説として依嘱されていたながら、その中に国策批判の一面を孕み、しかしまふまふと戦争協力文学のレッテルを貼らせたことは、相対化され問い直されなければならない。その危険性とそれを犯す野心は、『お伽草紙』などの比ではないだろう。

一方で、『惜別』に相当の野心を以て込められたであろう抵抗の一面は今日まで日の目を見ることはなかった。国策小説という体裁から、『惜別』は太宰文学の中でも屢々異端視され、

魯迅と「周さん」の相違に固執した竹内以下諸論によつて議論は停滞してきたのである。

太宰は、戦後になると、激動の時代の中で転々と掌を返す「新型便乗」を繰り返して批判した²⁵⁾。戦時下には、抵抗のために形だけとはいえ時局に迎合した経験や責任が、それを許さなかったであろう。そしてまた、太宰は自身を含む全ての国民が戦争に加担したことを積極的に認めるよう促した²⁶⁾。それは、抵抗のための迎合さえも罪として曝け出そうとすることによる、戦時下²⁷⁾に時局を妄信していた者らへの批判であり、また戦時下に散々神国日本を謳つておきながら、戦後掌を返すように戦時下の愚行を詰問し合う時局に対するアンチテーゼでもあった。太宰の戦後批判は、遡つてみれば、彼が戦時体制に迎合しつつも一方で抵抗の姿勢もまた有していたことを物語っている。

国策小説という体裁は、一般に、自由な表現活動を縛る足枷である。しかし、『お伽草紙』や『右大臣実朝』に描かれた日本的題材と同様に、国策小説という体裁もまた、『惜別』においては、太宰的特質を開花させるために不可欠な制約であった。学生時代は素封家という出自、作家デビュー後は権威的文壇といった様々な制約の下で筆を走らせ、制約そのものを揺るがしてきた。『惜別』は、太宰文学の異端ではなく、むしろその正統な流れを汲むものだったのである。竹内らが魯迅に背負わせてきた「屈辱感」、それは植民地主義批判を大義名分とする大東亜共栄圏の論理に添うものであったが、「老医師」の語りには「周

さん」をその文脈から解放した。迎合か抵抗か、国策小説か否か、戦時下の太宰文学もその不毛な二極論から解放されなければならぬ。

注

(1) 本稿における太宰作品並びに書簡からの引用は、全て『太宰治全集』筑摩書房 一九九八年二月(各巻に拠っている。なお、□は引用者注を、/は改行を示す。

(2) 大東亜共同宣言の小説化企画については、尾崎秀樹の労作「大東亜共同宣言と二つの作品 —『女の一生』と『惜別』—」(『文学』一九六一年八月)を参照した。

(3) 「小説の部」の依頼作家は以下の通りである。なお、実際に発表されたのは、太宰治『惜別』(朝日新聞社 一九四五年九月)と、「戯曲の部」の森本薫「女の一生」(一九四五年四月渋谷東横にて初演)のみであった。

「共同宣言」全般に互るもの 大江賢次

「共存共栄」の原則 高見順

「独立親和」の原則 太宰治

「文化昂揚」の原則 豊田三郎

「経済繁栄」の原則 北町一郎

「世界進運貢献」の原則 大下宇陀児

(4) 竹内好「太宰治のこと」(『太宰治全集 第三巻』「月報」(筑摩書房 一九五七年一月))。引用は「竹内好全集 第十三巻」(筑摩書房 一九八一年九月)。

(5) 赤木孝之「戦時下太宰治の一側面—『惜別』をめぐる—」(『新編 太宰治研究叢書1』(近代文芸社 一九九二年四月))。引用は赤木孝之『戦時下の太宰治』(武蔵野書房 一九九四年八月)。

(6) 藤井省三「魯迅—東アジアを生きる文学」(岩波書店 二〇一一年三月)。

(7) 竹内好「藤野先生」(『近代文学』一九四七年三月)。引用は竹内好『竹内好全集 第一巻』(筑摩書房 一九八〇年九月)。

(8) 神谷忠孝『惜別』(東郷克美・渡部芳紀編『作品論 太宰治』(双文社出版 一九七四年六月))。

(9) 太宰治「返事の手紙」(『東西』一九四六年五月) ほか。

(10) 一例としては、「雲雀の声」(未発表 一九四三年一〇月脱稿)は出版が見送られ、「花火」(『文芸』一九四二年一〇月)は発表後に全文削除の命を受けた。

(11) 高田千波「除外のストラテジー—太宰治『お伽草紙』論への一視角—」(『駒澤国文』一九九五年二月)。

(12) 何資宜「太宰治『十二月八日』試論—『語り』構造—」(『国文学攷』(広島大学国文学会 二〇一〇年九月))は、「十二月八日」は太宰が同時代の十二月八日言説をコラーージュ形式で繋ぎ合わせたものであり、そこに太宰のアイロニカルな(芸術的抵抗)を見出している。一方で、赤木孝之「戦時下の太宰治」(武蔵野書房 一九九四年八月)は、「十二月八日」を「太宰の昂ぶりを素直に書きとめた戦争小説」としている。

(13) 武田泰淳・臼井吉見対談「太宰治と現代文学」(『太宰治全集 第八巻』「月報」(筑摩書房 一九六七年一月))。引用は『武田泰淳全集 別巻一』(筑摩書房 一九七九年九月)。

(14) 鳥居邦朗「文学的抵抗」(三好行雄・竹盛天雄編『近代文学6 昭和文学の実質』(有斐閣 一九七七年一〇月))。

(15) (2)に同じ。

(16) 尾崎秀樹「惜別」前後」(『文芸日本』一九五九年六月九月)。引用は尾崎秀樹『魯迅との対話(増補版)』(勁草書房 一九六九年八月)。以下の尾崎の言も同書同論による。

(17) (16) に同じ。これにしたがって、尾崎は、この時点での「周さん」像は小田の描く魯迅像に依るところが大きかったと考えている。

(18) (4) に同じ。

(19) 太宰治「十五年間」(「文化展望」一九四六年四月)に「戦時日本新聞の全紙面に於いて、一つとして信じられるやうな記事は無かった」とあるほか、諸書簡にもジャーナリズム批判が散見する。

(20) 「物語論」諸用語は、G・ジュネット著(一九七二年)／花輪光・和泉涼一訳『物語のディスクール』(水声社 一九八五年)による。

(21) 亀井勝一郎「大庭葉蔵」(亀井勝一郎『智識人の肖像』(文芸春秋新社 一九五二年七月)に次のようにある。引用は小山清編『太宰治研究』(筑摩書房 一九五六年六月)。

「死の抗議」という言葉がある。あらゆる表現を失った後、或は表現に傷ついた後、自分の死体を以て応酬する一種の復讐である。徹底的な敗北者の、或は弱者の、無抵抗の抵抗と云ってもよい。太宰治の抵抗はそういう種類のものであり、そのとき黒点は最大の原動力であり、またこれを最大限に活用した。換言すれば自己崩壊の極限を示す。崩壊せる自己をまず設定する。最も卑しく恥ずかしめられたものとしての醜態を虚構すると云ってもよい。彼はいたるところで生々と「死骸」を描いた。そしてすべては「世間」に対する抗議につながる。

(22) 竹内好『魯迅』(日本評論社 一九四四年二月)。以下の竹内の言も同書による。

(23) 浦田義和『惜別』(「無頼の文学」一九七八年二月)。引用は浦田義和『太宰治 制度・自由・悲劇』(法政大学出版局 一九八六年三月)。

(24) 魯迅が仙台留学を終えた翌年に発表した評論「摩羅詩力説」に、同様に「無用の用」に関する一節がある。しかし、原文とも、当時太宰が目にしたであろう松枝茂夫訳とも、異なるところが多い。現実に沿って解釈するならば、作中作「文章の本質」は後の「摩羅詩力説」の草案といった扱いか。

(25) 一九四六年一月二日尾崎一雄宛書簡に「このごろはまた文壇は新型便乗、ニガニガしき事かぎりなく、この悪傾向ともまた大いに戦ひたいと思つてゐます。」とあるほか、一月一日井伏鱒二宛書簡に「このごろの雑誌の新型便乗ニガニガしき事かぎりなく」云々、一月二五日堤重久宛書簡に「いまのジャーナリズム、大醜態なり、新型便乗といふものなり。」とある。

(26) (25) 前掲書簡等にみられるほか、(9) 前掲「返事の手紙」でも「私たちは程度の差はあつても、この戦争に於いて日本に味方をしました」、「私たちはこの大戦争に於いて、日本に味方した」と繰り返されている。